



## ヨモギの力

佐佐木 邦子

野原を歩いているとヨモギが目につくようになった。ヨモギが萌え出すといよいよ本格的な春だ。三月の雛祭りから五月の節句にかけて、ヨモギは草餅になって何度も登場する。

春先の今は柔らかいきれいな緑色だけれど、もうしばらくたつと始末におえないほど繁茂してくるだろう。固くて、根っこが深くて、庭の草むしりでも手を焼かされる。抜いても抜いても出てきて、どうしてこんなに伸びるのだろうと泣きたくなることもある。

そのすさまじいばかりの繁茂力に、人は昔から神秘的なものを感じていたようだ。ヨモギの力で災難から逃れた話は、宮城県にも多い。ある男が鬼に捕まって山へ連れて行かれそうになった。やっとのことで逃げ、ヨモギとショウブの茂みに隠れる。鬼はヨモギに触れると体が腐るから、近寄れずに行ってしまった。それがちょうど五月の五日だったので、魔性のものが来ないように五月節句にはヨモギとショウブを軒に吊すようになったとか。

七夕に飾るくす玉も、干したヨモギを束ねて魔除けに吊したものが原形だ。虫除けや腹下しの薬にも使われる。眠れないときはヨモギの風呂に入るといい。亡くなった私の父は医者嫌いだったが、何かというと灸をすえていた。灸に用いるモグサもヨモギだ。

人が死んだときヨモギを使った例も多い。葬式の大きな目的は、死者がどこへ行けばいいか迷ったりせず、行くべきところへきちんとして行き着けるようにすることだ。人が死ぬと、この世とあの世の境の扉が開く。その開いた扉へ死者は入っていくのだが、扉付近にいた悪い魔物も漂い出てきて、死者を別な方向へ引っばって行こうとする。そうなのは困るので、魔物が近寄れないように、死者の胸に刃物をのせたり、逆さ屏風で囲ったり、庭でヨモギを燃やしたりした。ヨモギで矢を作った土地もある。

魔物は鉄砲玉などものともしないけれど、ヨモギの矢で射られると退散せざるを得ない。魔性のものが住んでいる異界と、人が暮らすこの世の境に、ヨモギの原っぱが広がっている。この原っぱのおかげで人は異界に迷い込まずにすんだ。春に草餅を食べるのは季節の味を楽しむだけでなく、ヨモギの力で魔を退けてもらおうとする祈りが籠められている。草餅から葬式のヒナワまで、生と死の境に生い茂って、遠い昔から人を守ってきたのがヨモギだ。ヨモギがお墓にはえるのも、草むしりで泣きたくなるほど根を張っているのも、当たり前なのかもしれない

2008.4 こもれび第5号